

歴史学習から何を学んで来たか

—大学生にとっての既知の学び、未知の学び—

岩崎 好成

What Have Our College Students Learned from History?
: On the Various Meanings of History Learning

IWASAKI Takashige
(Received December 7, 2009)

キーワード：歴史学習、学ぶ意味

はじめに

「子どもに訊かれました。教師として答えて下さい。①歴史の勉強って何の役に立つの？ ②なぜ、過去のことなんか学ぶの、意味ないじゃん？ ③学ぶと何が得られるの？例えば何を得たの、先生は？」

これは、小学校教諭免許状取得希望者に対して1年次後期に開講されている講義「初等科社会」（一いわゆる「教科に関する科目」の一つ）の中で、筆者（一歴史分野4回分を担当）が受講生に回答を求めたアンケート項目の一つである。授業では、その回答十数例を過年度のそれを加えて翌週に紹介し、その上であらためて、
<そもそも歴史学習からは、出来事それ自体以外に、どのようなことが学べるのか>
との問いを設定している。それに対する筆者なりの（この講義向けの）回答七点は本稿第1章以下に示す通りであるが、授業では、それらを解説した後に再度、次のようなアンケートを（全講義終了後に）行っている。

「プリントNo. 4には<歴史学習からの学び>が七点挙げられている。A：このうち、授業で指摘されるまで気づいていなかったものをすべて番号で挙げよ。 B：七点のうち、特に印象に残ったものを一つ取り上げ、その番号と理由等を述べよ。」

本稿は、このアンケートへの回答三年度分をもとに、受講生、すなわち小学校教員免許を取得しようとする大学1年生が、筆者が挙げた<歴史学習からの学び>の何を承知し何を承知していないのか、また、それらの学びの意義をどうとらえているのかを明らかにしようとするものである。

但し、原稿枚数に制限があるため、学び七点についての詳しい解説や回答結果・内容の本格的分析は別稿に譲らざるをえない。以下の各章においては、授業プリントで示した七つの学びの要点を冒頭で紹介し、そこに、学びそれぞれに対する既知・未知の受講生数と「印象に残った」所以を語るコメントの引用を加えるかたちで、論を進めることにした

い。

なお、当該アンケートの回答者数は、2007年度59名、2008年度51名、2009年度69名、合計179名である。

1. 感動や驚きを得る（学び①）

（非-実学＝基礎学としての歴史学(習)ならではの学び。）「役に立たない＝無意味」という発想の否定。有用無用に関係なく、歴史学習からは感動や驚きを得られる。「わくわく・ゾクゾク・ヘー・凄い・面白い…」は非常に大切なファクターである。

授業で指摘されるまで気づいていなかった、とした者は179名中49名で全体の27%にとどまる。が、特に印象に残った学びとしてこれを選んだ者の数は比較的多く36名(全体の2割)に上る。

そこでは、この学びを不承知であった理由が次のように語られている。

「私がこれまで受けてきた歴史の授業はその多くが詰め込み型のものであったので、歴史学習から感動や驚きを得られた記憶がない。」

「私は大の歴史嫌いで、いつも何故こんな授業を受けないといけないんだろう、億劫だ、昔のことなど関係ない、と思っていた。勿論、歴史に対して感動や驚きを得たことなどなかった。初等科社会の授業を受けてハッとした。あの頃の私に足りなかったのは感動や驚きを得て楽しむ心だったんだな、と。」

他方、感動や驚きを学びの一つと見なす立場を肯定されたことに対し、ある種の安堵感を表明しているものもあった。

「私が一番印象に残ったのは①です。私は歴史が苦手だったのですが、この考え方を知ること、暗記が苦手だっただけで、一番大切なことである歴史を通して感動や驚きを得ることなら私も体験していたので、それでよかったのだと思えたからです。」

「①が特に印象に残りました。というのは、単純に私が歴史を好きな理由がそこにあるからです。歴史から学ぶことは山のようにあるとは思いますが、しかし、歴史にはたくさんドラマが展開していて私が想像もつかないような世界が無限大に広がっている。それを学ぶことで様々な感動や驚嘆があることが本当に面白いから、私は歴史を学んでいました。」

また、この学びの意義・魅力に関しては、以下のように有用性如何の観点から語られるものが多い。

「最も印象に残ったのは①だった。なぜなら、私は今までなぜ歴史を勉強するのか全くわからなかったが、その最大の理由は、数学や英語などと比べて役に立つとは思えなかったからだ。しかし、この学びを知って、確かに感動や驚きは子どもに必要なものであり、そこに有用無用は関係ないと思った。」

「実学の対極をなすのは基礎学である、とは考えたことがなかった。歴史学習は私の生活に直接有益性があるわけではない。つまり実学ではない。しかし、『効用を超えて生きることの意味や歓びにじかに連なる』¹⁾のが基礎学と知り、なるほどと思った。実用性はないが、今と違った価値観や今は忘れられてしまった習慣を学ぶことは

面白い。それが基礎学としての歴史教育であると知った。」

「気づいていたようで気づいていなかったことだった。勉強というものは少なからず、役に立つからだったり、役に立たせるためにするものだと思っていたが、無用なものでも“感動や驚き”があれば学びになるのだ、ということを知り衝撃を受けた。自分があまりそのような体験をしたことがなかったのでショックを受けると同時に、子ども達に是非味わわせてあげたいと思った。」

「“役に立たない＝無意味、という発想の否定”という言葉を目にした瞬間、何ともいえない感動がありました。思い返してみると、偉人の話を聞いて『すごい！』と思ったり、日本の誇れる建物を見て『わあー！』と思ったり、小学生の頃だけでなく幾つになってもそういった感情って凄く大切に心に残りますよね。歴史学習において、小学生という重要な時期に、効用を超えて子ども達に感動や歓びを通して生きることの意味をも教える教師になりたいです。」

ちなみに、09年度受講生69名のうち22名が、特に印象に残った学びとして①を挙げているが、そのうちの10名にとってはこの学びは新知見ではなく既知のものとして分類されている。では、この10名は①をどのように再考したのであろうか。彼らはこの学びの意義・魅力を、例えば次のように語っている。

「僕が今まで歴史を学んできて、①の内容のように思ったことが何度もあった。歴史を学ぶことで感動や驚きを得られると、自分から興味をもって学んだり調べたりすることで、新しい発見があるかも知れないと思う。また、嫌々学ぶのではないので頭にも入っていくと思う。この経験を子どもにさせたいなと思ったので①が最も印象に残った。」

「小学校教員を目指している自分にとって、特に①は大切なことであると感じた。私が歴史教育をすることになれば、子ども達に歴史の知識を詰め込む授業をするのではなく、『歴史ってすごい。楽しい。もっと勉強したい。』というような興味や関心・意欲を子ども達にもたせるような授業をしていきたいと思う。」

「私が歴史を教えることになった時、感動や驚きを一番大切にしたい。毎日が面白い授業というふうにはいかないかもしれないけれど、この感動や驚きこそが『まじめに授業を受けなさい』なんて言葉より、授業に対する意欲の直接的なエネルギーになると思う。」

2. 事象の起源や展開過程を知る（学び②）

（時間的変化を扱う歴史ならではの学びのひとつ。）現在は過去の延長線上にある。現在をよりよく知ろうと欲すれば過去を知らねばならない。歴史学習は、現にある諸々の事象の起源や今日までの展開過程を教えてくれる。あるいは、現在（の我々）が過去に規定されていることを教える。例えば、我々は日本国民であるがゆえに、日本国の過去にもとづいて他国民から批判されることがあるし、先人の苦労や努力の上に我々の現在の生活がある。このことに思いを致す時、未来社会（＝後代）への責任意識も培われうる。

指摘されるまで気づいていなかった、とした者は24名で全体の13%にあたる。言い換え

れば、受講生の87%にとっては既知の学びということになる。

特に印象に残った学び、として12名がコメントを寄せているが、その一人は学びとして不承知であった理由を、次のように述べている。

「特に印象に残ったのは②である。なぜかと言うと、今まで自分は、過去は過去、今は今というように完全に歴史の流れを無視していたからだ。戦争やかつての文化や伝統も自分にはまったく関係ない、などと思っていたことは今となってはとても恥ずかしい。」

一方、歴史学習から学べるものの一つとして承知していたが、最も印象に残ったものを問われればこれを挙げる、としている者は、例えば、次のようにこの学びの意義を語っている。

「過去に日本がどのような事を行ってきたかということが、他国から見た現在の日本の印象に少なからず影響しているのではないか。また、私たちの行いによって後代の日本の印象が決まってしまうのではないか、と考えると、とても責任のあることのように思った。」

「現在は過去の延長線上にある、という当たり前のことが、私にはとても印象に残りました。現在をよりよく知ろうとするには過去を知らねばならないというのに、私たちは新しいものばかりにとらわれて、過去を知ろうとしていないと思うことがありますからです。また、歴史は良くも悪くも後代に影響を及ぼします。今に生きる私たちも歴史を作っていて、また後代に受け継がれるということを教えてくれました。」

「今を生きるにおいて、過去を知ることは自然なことだと実感した。時代の流れとして過去があり今があるわけで、『昔はどうだったんだろう』と好奇心が芽生えるのは当然のことだが、教育課程の中で歴史を教えるのが当たり前になっている今、その好奇心を子ども達自身が気づいていないことが多く、好奇心を膨らますのも教師の役割なのだと強く感じた。」

3. 過去と現在の比較によって“幸せ”を再吟味する(学び③)

(時間的変化を扱う歴史ならではの学びのひとつ。) 過去と現在を比較することによって、「幸せ」「豊かさ」「進歩」「野蛮」など(の意味・中身)を再吟味できることがある。

授業で指摘されるまで気づかなかった、とした者は100名であり全体の56%にあたる。特に印象に残った学びとしてこれを挙げた者は50名(全体の28%)で最も多い。この多さの主要因は、おそらく、授業での説明事例として挙げた加藤公明実践から受けたインパクトの大きさに拠るものであろう。

以下の四つは、同実践の内容や生徒の感想文に衝撃を受けた(がゆえに特に印象に残った)とコメントしたものである。²⁾

「過去と現在では明らかに今の方が技術も進歩し便利な世の中になっています。しかし、便利な世の中で生きていられるから幸せというわけではありません。過去に、乞食の身体障害者の人たちが神に近い存在として見られ、それにふさわしい固有の価値を認められていた社会が存在していたことに非常に驚きました。今では考えられない

からです。幸せな社会とは何なのかを考えさせられました。」

「一人前の人と見なされなかった彼らは、死に近いことから神に近い存在と考えられていたのではないかと、というのは私も初めて知ったことで、それは果たしていい考え方なのかなという疑問も湧いたので、とても印象に残りました。」

「特に印象に残ったのは、『ここで人間は学問をすべきだと思いました。』という生徒の言葉です。この歴史授業をした先生はすごいなと思いました。なぜなら、授業を通して何を生徒に学んでほしいのか、という明確なものを持っていて、それが実際に生徒に伝わっているからです。それは容易なことではなく、歴史を生徒に伝えたいという情熱が感じられます。それを素直に受け取った生徒もすごいと思いました。私は今まで歴史を学習してきて、そのようなことを感じたことはありません。」

「例として挙げられていた実践の、生徒による感想文が印象的だった。単に歴史は過去のことを知るためのものではなく、『豊かさ』や『幸せ』なども歴史を通して間接的に学ぶことができるのだと私自身が理解できてよかった。なぜ学ぶのかという問いに対して、私が探していた答えが見つかったと思った。」

この学びの意義・魅力それ自体について語っているコメントには、次のようなものがある。

「過去と現在を比較することで『豊かさ』や『進歩』を味わった経験は誰にもあると思う。歴史を学ぶことで今を再認識できる。歴史を嫌っていた私が、今はもう一度勉強したいと思うほど、歴史に対してワクワクする。」

「印象に残ったのは③である。私自身は、過去と現在を比べることで現在がいかに『幸せ』なのかがわかるのだと思っていた。しかし、この例にあるように、一体なが幸せで豊かなのか、その根本を考えるきっかけに歴史学習がなることがわかり、衝撃を受けたからである。」

「『進歩』という言葉について言えば、過去と現在を比較すると多くのことが過去より進歩してきているように私たちは考えがちである。しかし、(倒れずに来た)五重塔や銅鐸(の肉厚の薄さ)について考えてみると、これらは現在の技術を用いても再現が難しいということであるから、現在の方が進歩しているとは言い切れないのだなと感じた。私たちは現在の考え方ややり方などが正しいように思いがちであるが、歴史学習を通してそれを再吟味することは大切なことであると思った。」³⁾

「本当に今の世の中の現状がすべて正解で幸福なのか、本当の豊かさとは何かなど、今まで常識であると思っていたことが、紹介された歴史のこの例にあるような事実から考え直すことができると感じた。歴史からただ単に昔何が行われていたかといったような知識だけでなく、私が今まで思っていたよりも深く大切な事実が学べる、ということが大変印象的だった。」

「③を読んで、こういった道徳的な見方からも歴史を学んだことがあったことを思い出した。歴史は最後はいつも暗記を強いる科目なので、そのことを忘れてしまっていた。歴史が暗記だけの科目ではないことを再認識させてくれた点で③が印象的だった。」

更に、学びの①や②に言及した上で、この学びの意義を語る次のようなコメントもあった。

「私は、歴史を学ぶことが過去と現在を比較することにつながると考えたことはあり

ませんでした。過去があって今の日本がある、と単純に考えて勉強してきたことしかなかったからです。どちらの社会が住む人にとって幸福かを考えて学ぶということは、感動や驚き以上に印象深く学ぶことができるのではないかと思います。」

「過去と現在を比較することによって、現在いろいろ便利な道具や機械に囲まれていることの幸せをあらためて感じることができる。また、それらのものの進歩の過程を学び、それらを作り出し現在の私たちの生活を支えてくれている過去の人々に対する感謝の気持ちも生まれてくる。しかし、過去の暮らしが幸せでない、豊かでないわけではない。それぞれの時代の環境の中で人々が協力し合い工夫して、豊かな生活を送れるよう日々努力していただろう。その時代ごとの幸せがあると思う。過去と現在を比較しつつ、そのことに気づくことも大切なことだと感じた。」

4. 「常識」「自明」を相対化する（学び④）

（時間的変化を扱う歴史ならでの学びのひとつ。）「常識」を揺さぶり相対化してくれるのも歴史学習。過去を遡ることによって、現在の常識が必ずしも通用しない世界があること、また、現在普遍（・不変）とされている制度・価値観、あるいは「昔からの伝統」と見なされているものが、数十年程度の歴史しかもっていないことを知ることがある。ここから我々は、自分の中にある根拠なき思い込みや偏見を発見したり、現在の良好な制度・環境が何もしないで自動更新され続けるわけではないことを学びうる。

指摘されるまで気づかなかった、とした者は179名中132名で全体の74%にあたり、多くの者にとって未知の学びということになる。最も強く印象に残ったものとしてコメントを寄せている者は17名（9%）である。そこでは印象に残った理由が、例えば次のように述べられている。

「身の回りにある『昔からの伝統』とされているものの歴史は意外にも短い、という視点がとても新鮮だったので。」

「地理においても日本の常識が世界の常識でないように、現代日本では考えられない常識を垣間見るとは、学習者の歴史に対する驚きと関心を生ずるだろう。ただ、それが歴史学習の意義の一つだとは気づいていませんでした。」

また、理科教育を専攻する1年生と3年生からは、その当否は別として、次のように、常識を揺さぶり相対化する歴史学習というものが対照的に語られている。

「思いもよらない視点からの学びであったために特に印象に残った。このような学びの視点は理科にはないものであり、理系的な考え方ではなかなかできないと思った。」

「教育実習での理科の授業や道德の時間を通して、常識を揺さぶることの大切さは知っていた。しかし、理科などと違い史実を学んでいく歴史の授業で揺さぶりを作れることに驚いた。」

この学びの意義や魅力について、より積極的に語っているのは次の四点である。

「今私たちが当たり前で過ごしている生活が決して当たり前ではないということ、『歴史』という過去の事実の理解を通して身をもってわかるということが、あらため

て認識できた。」

「確かに、私たちの周りには、伝統として古来より受け継いできたものと思込んでいるものが結構あると思います。そういった思込みによって歴史観が大きく変わってしまうこともまた多々あるように感じる。歴史教育には、そういう偏見を取り除く役割もあるのだという事実は、とても印象に残りました。歴史教育というのは自分が思っている以上に大きな役割を果しているのだな、と思いました。」

「深く考えたことはなかったけれど、確かに当たり前とされる常識や伝統がどんどん変化してきたことに、歴史の面白さを感じました。例えば、女性は外に出る時は顔を隠していた時代がありますが、現代ではそんなことをすれば変人扱いです。一方、外国にはまだ女性が顔を隠す制度を持っている国もあります。そのような国はきっと、日本で大事にされていた考え方と似たものが守られているのだと不思議さも感じます。また、常識が変化していく過程には、当たり前とされる考え方をくつがえした勇氣ある人物も存在するのでしょうか。」

「“なるほど”と共感できた。私たちが、常識だから…で済ましていることはたくさんあると思う。実際それがどのような形で、いつ、誰の手によって常識にされたのか、は考えていないことにあらためて気がついた。そこから考えることで、その常識が本当に正しいのかを考えることができると思う。それをきっかけに差別や間違った考えを改めることができると思う。」

ちなみに、09年度において、気づいていなかった学びは一点のみ、とした受講生は二名いた（一その一人は④を、いま一人は⑤を指摘）が、両者が最も印象に残った学びとして挙げたものがこの④である。

「④の内容は今まで考えたことがなく、歴史を学ぶという行為の新しい意味に自分としてはなった。特にこの歳になってくると、常識という言葉にとらわれてしまい、自分の考える世界が狭くなってしまった気がする。」

「学問というものは、そのほとんどが人間の暮らしや人生をより豊かにするためのものだと思う。だとすれば、歴史を学ぶ意味は何か。歴史を学ぶ上では『相対化』という作業は必要不可欠である。そこでは、今の世の中と昔の世の中が違うことや、『常識』というものは変わりうることを教えてくれる。小中高の時期に、自分の偏見や思込込みが通用しない世界があること、人によって価値観などが異なることを学ぶのは、きわめて重要だと思う。」

5. 概念の意味・成り立ちを実例で理解する（学び⑤）

（言わば、“歴史で学ぶ”という類のもの。）歴史学習は、ものごとの本質や概念の意味するところを実例によって明らかにしてくれる。民主主義とは何か、支配・権力にはいかなるタイプがあるか…。人間って本質的なところでは変わらないな…。この意味で、遠い異国の古代史も身近なものになるのである。

授業で指摘されるまで気づいていなかった、とした者は179名中105名(59%)であり、ほぼ未知・既知相半ばする学びということになる。が、特に印象に残った学びとしてこれを挙げた者は最も少なく6名に過ぎない。その理由は不明だが、受講生にとって「特に」と

言うほどのインパクトを感じなかったか、あるいは、コメントを付しにくい学びとして敬遠されたのかも知れない。⁴⁾ここでは、文意不明のものを除いた五点を紹介しておく。

「小学校では私たちの当たり前を学習するのだと、そして、それが重要なのだと気づきました。言葉の概念(の形成)理解に社会科の歴史教育が大きく関わっているとは考えたことはありませんでした。それを知れたことが新鮮でしたし、物事を深く考える上での土台になるのだと感じ、歴史教育も魅力的だと思いました。」

「そう言われてみると、辞書に載っている言葉も、過去に実際に起こってそういう名前が付いたからこそ存在しているのであり、過去がなかったら現在のことは何も理解できないな、と納得したから。」

「小学校での歴史学習は算数などと違って実用的でないため、学習理由を説明しにくいと思います。そこから、小学生が疑問に感じた時の説明理由として、いま大学生である自分でもなるほどと納得できる理由だと思ったので、この学びが印象に残りました。」

「物事の本質や概念の意味するところを実例によって学ぶ、ということに納得した。実例を挙げることによって、古代から現代までのことが身近なものになるし、人間が本質的なところでは変わらないということもわかると思う。歴史学習はあまり好きではなかったが、これを知っていたらもう少し楽しかった気がする。」

「以前、別の講義で、小学校での教育は様々な教科・科目と連動した内容で教えることが望ましいということを知った。その点で、歴史に出てくる言葉の意味は国語の授業と連動したものと言える。歴史で使われる言葉は難しい意味のものもしばしば出てくるが、歴史の内容とともに学習することですんなりと身に付くので魅力的である。」

6. 教訓を得る(学び⑥)

(言わば、「歴史に学ぶ」という類のもの。)しばしば「教訓を引き出す」と言われるように、歴史学習は現代社会、あるいはそこに生きる個々人が抱える問題の解決のための糸口・ヒントを提供する。過去の人物や人々の営みから生きる上での指針や励まし・誇り、あるいは警告をもらうこともあれば、過去の事象を観察することで、今後の事態の推移を予測することも可能になる。(但し、「過ちをくり返さない」ためには小・中・高それぞれ、どういう歴史学習をすればよいのかを深く考える必要がある。)

指摘されるまで気づいていなかった、とした者は59名で全体の33%にあたる。逆に言えば、7割近くを受講生にとって既知の学びということになるが、筆者には33%という数値は予想以上に高いものであった。特に印象に残った学びとしてコメントを寄せているのは19名、11%である。

ある受講生は、不承知であった理由、印象に残った理由を次のように言う。

「私は、歴史教育とは主に、過去に起こった出来事を学ぶことだと思っていたからです。歴史を学ぶことによって今後の事態の推移を予測することも可能になる、とは今

まで考えたことがありませんでした。確かに、過ちをくり返さないためには、過去から学んだことを今後活かしていかなければなりません。また、過去の人物や人々の営みから生きる上での指針や励まし等をもたらすことがあるという点に、自分が気づかないうちに過去から恩恵を受けていたのだと気づかされました。」

別の受講生も、ほぼ同様の内容を語る。

「歴史学習を通して、現代にいる私たちがよりよく生きていくためのヒントを得ることができる、ということは非常に有用なことだと思います。これまでは、過去にあった出来事をただ知ってゆくだけでしたが、ただ知るだけでなくそれを現代にあてはめて参考にするによって私たちの人生に活かす、という新たな歴史の考え方を発見することが出来たからです。」

また、この学びの意義については、次のようなコメントが寄せられている。

「もし歴史について学ぶことがなければ、例えば戦争の恐ろしさなども伝えることができず、再び戦争が起こってしまうかも知れない。プリントを読んで、歴史教育は、多くの人々が暮らしやすく失敗を繰り返すことのない世の中を作るためには必要なことだと考えるようになった。」

「すべての未来がわかるわけではないが、過ちをくり返さないためにも、過去の事象を教訓にすることを教えるということに意味がある。また、過去の人の勇気を自分の励ましにすることもでき、単に過去に何があったのかを知るだけではない授業を展開できると思った。」

「同じ過ちをくり返さないために、過去の事象を観察し今後の事態の推移を予測することが大切だと思う。未来のために歴史学習が必要なのだと思う。」

「過ちをくり返さないためにも、歴史学習によって、これからの世代に伝えていかなければならない。ただ知るだけでなく、私たちには次に伝えるという使命がある、ということであらためて実感した。」

7. 他人を説得する力を身に付ける (学び⑦)

(歴史学の手法を踏まえてこそ得られる学び。) 仮説を立て論理的整合性と実証を大切に学習することは、自らの意見を構築する力や他人を説得する力を身に付ける訓練になる。歴史に親しむ、歴史学習の手法に親しむことは、モノの見方や人間理解を豊かにし、また、モノの見方が立場によって異なりうることを教える。

指摘されるまで気づいていなかった、とした者は179名中150名で全体の84%にあたる。歴史観や歴史学の手法に関わることからすれば、最も根本的な学びと言えるこれを、大半の大学生が承知していないという事実には、きわめて重いものがある。それを受講生はどのように語っているのであろうか。特に印象に残った学びとして、これにコメントを寄せている者は39名である。この数は全体の22%で二番目に多い。

次の三つのコメントは、当人がこれまで保持してきた歴史学習のイメージとこの学びとの間にあるギャップを端的に示すものとなっている。

「私にとって、歴史を学ぶということには受動的なイメージが強かった。今までも、教えられたものをただそのまま受け入れていたのだが、仮説を立てて歴史について疑

問をもち実証を重んじることが大切だ、ということに初めて気づかされた。そして、そのことが自らの意見を構築したり他人を説得したりといった、歴史の学習という枠を越えた訓練になると知り、とても驚くとともにその通りだと感じた。」

「歴史は覚えることが大切だと私は今まで思っていたが、本当に大切なのは覚える前、つまり考えるところにあると知った。また、その中で、自分の意見をもち、そして使うことを学ぶ機会を与えることが、歴史を教える上で重要なことだとわかった。」

「今まで歴史イコール暗記というイメージしかなかったが、この授業を通して、歴史は論理的整合性と実証性によって成り立っていることがわかった。また、論理的に物事を整理しながら考えることは自身の論理的思考につながるのだから、自らの意見を構築する力、他人を説得する力になると気づかされた。歴史教育の見方が少し変わってきた。」

また、「自らの意見を構築する力や他人を説得する力」を身に付ける学習の場として歴史学習が位置づく、ということへの驚きを述べるコメントもあった。

「このような力は国語学習から得るものだと考えていたので、とても意外でした。歴史の授業で仮説を立てて討論などしているうちに、論理的整合性と実証性の必要性を知ることができ、それを使って自分の意見を堂々と発表できるようになるのは、子ども達にとって自信につながる良いことだと思います。」

「こういう力は、読書をして国語力を付けたり、道徳などの時間でディベートをやるなどして身に付けるものだと思っていた。だから、歴史学習でそういう力を身に付けることができるというのは、自分にとって新たな学びだった。」

更に、「今まで歴史学習とは過去にあった出来事や人物について知ることだけだと考えていた」ためか、「仮説を立てる」という営みそのものが「とても新鮮であった」とするものや、以下のように、討論学習における実証の必要性に焦点化したコメントもあった。

「今回授業を受けて、歴史についてクラスで討論する時、子ども達が意見をたくさん出したことに満足するだけでなく、ちゃんと実証させることの大切さに気づくことができた。」

「根拠をもとに筋道を立て討論することで、自分の意見に一貫性を持たせ他人を納得させることができ、また、思いつきの意見表明合戦になることを避けることができる」と聞き、とても納得した。」

他に、歴史観あるいは、その土台としてのモノの見方に関し、例えば、「同じ史実でも階級や立場の違う人の目で見ると、また違ったふうに見えるということ」を例示しながら、「言われてみればそうなのだが、今まで歴史を学んできた中では気づかなかった」とするコメントがあった。次の二点も同種のものである。

「私は、考え方の視野を広げるといことは、実際に自分が経験をしたり他の考え方の人々と接触して初めて生じるものだと思っていた。しかし、歴史に親しむことによってモノの見方や人間理解を豊かにすることが可能だ、ということに気づかされ私自身の視野も広がった。」

「私は、最も嫌いだと言えほど歴史学習が苦手だった。単に暗記するのが苦手だけでなく、なぜ過去のことを学ぶ必要があるのかなどと思っていた。しかし、モノの見方が立場によって異なるのは当然であり、それは自分の歴史観として認識すればよ

いのであることを知った。今までより歴史への関心が持てるようになった。」

おわりに

最後に、アンケート項目Aすなわち、〈歴史学習からの学び〉七点のうち、(大学1年後期開講のこの)授業で指摘されるまで気づいていなかったものをすべて挙げよ、に対する179名の回答の分布状況を再提示して本稿を閉じることにしたい。なお、「はじめに」において記したように、学び七点についての解説や回答結果・内容の本格的分析は別稿で行うこととする。

項目Aに対する回答の結果は、次の通りである。

- ・学び①「感動や驚きを得る」を不承知だった者：49名(27%)
- ・学び②「事象の起源や展開過程を知る」を不承知だった者：24名(13%)
- ・学び③「過去と現在の比較によって“幸せ”を再吟味する」を不承知だった者：100名(56%)
- ・学び④「『常識』『自明』を相対化する」を不承知だった者：132名(74%)
- ・学び⑤「概念の意味・成り立ちを実例で理解する」を不承知だった者：105名(59%)
- ・学び⑥「教訓を得る」を不承知だった者：59名(33%)
- ・学び⑦「他人を説得する力を身に付ける」を不承知だった者：150名(84%)

以上から、おおよその傾向で言うならば、本講義受講生にとって、学び①②⑥が既知の学び、③④⑤⑦が未知の学びということになる。つまり、高校までの歴史学習において、筆者が挙げた学びはその半分以上が経験・獲得されていないのである。ちなみに、指摘されるまで気づいていなかった、として受講生それぞれが挙げた不承知の数ごとに分類すると、3個挙げた者が69名で一番多く、次いで4個挙げた者が58名と続き、上の既知・未知の数的分布にほぼ対応する結果となっている。⁵⁾

注

- 1) コメント中の引用は、授業中に紹介した哲学者坂部恵氏の言葉である。
- 2) 授業では、加藤公明氏の、例えば次のような言葉を紹介した。「一遍上人とともに中世の市にいた乞食たちは、当時の人々にとって無意味や無価値の存在ではない。人々と極楽浄土など聖なる世界をつなぐ聖なる役割を果たしていて、人々は単なるあわれみではなく、その意味や価値のために銭や物を提供していたのであった。」また、生徒の感想文は次のようなものである。「(中世と現在)どちらの社会が住む人にとって幸福か考えさせられました。これは歴史という学問がなければ分からない事実です。ここで、人間は学問をすべきだと思いました。」(加藤公明：考える日本史授業2、地歴社1995、p. 52)
- 3) 文中の「五重塔」とは、この地震の国で今でも江戸時代より前に建てられた22の五重塔が倒壊することなく存在していることに、建立当時の技術の高さを見たことを指す。

また、「銅鐸」とは、弥生時代の技術は、現代でも再現の難しい肉厚2ミリの銅鐸を作り出していた、と授業で紹介したことを指す。

- 4) 授業では、教育出版の教科書(=「小学社会 6上」平成16年検定済)叙述を利用して、卑弥呼と徳川家光の「支配」の型の違いを例示したが、いまひとつ腑に落ちなかったのかも知れない。
- 5) 不承知の数ごとの人数分布を更に示すと次のようになる。1個のみ不承知-4名、2個-22名、5個-20名、6個-4名。7個すべて不承知とした者も2名いた。逆に、すべて承知していたという者はいなかった。